



和漢文抄

詩類
辭類

歌類



百并集卷之二

和漢文採卷之二

○詩類 附序

△大和真名詩序

並發

東華坊

頃日撰分獅子庵之文庫^{ラトテ}連點檢燈^{スル}卷
詩^ヲ取^リ了^ル則從^ニ歌行詞曲之題類^ヲ雜^{セテ}五言
七言之律詩^ヲ而大既^ニ有^{ラカ}二百余首^モ取^モ乎
去^ル者從^リ延寶之中^ニ比及^フ貞享之末^ニ迄十
餘年^ノ之草稿也^{ナリ}其詩也^ヤ為^セ學^ニ木子太白^ノ之

大和真名

凡情字杜子美之凡次止乎字之而思
 之則心知而不口慙者從音訓之違
 決而知難字物了矣於茲從元祿之始
 思立大和之詩而製假名與真名之二
 樣了則假名之詩者從五七之句法殆
 為似和歌了共語路之拍子者謂漢土
 之詩矣于然謂真名之詩者協音韻些
 調平仄些蜂腰鶴膝之旋返一麼不肯
 漢家之詩法交以音訓之通路視之時
 者漢字也共聽之時者和文也栗左在

共有故翁之所謂事大和者從中昔之
 凡俗有狂歌有狂詩而以如夫者千金
 是者疝氣秀句與口相之雜話為名附
 詩共歌共栗左有者一應之酒與而謂
 猿樂人之輕口矣文章者例有娑情之
 二而娑情有先後事者從本詩歌之骨
 法也則言語之面通味者可口傳了共
 娑情之枯回者不心知與所我今傳居
 其向之糸筋而同以凡雅不認於諸越
 別以比與不狂于大和實麼思被喚我

朝之詩而將有雅俗通用之一格事歷
 乍充有和漢語之音韻而為用俚語之
 續了則似通昔之狂詩而不道散法之
 罪止所詮者為踏詩之六義此尋韻瑞
 活法之古語而用二字三字之韻礎居
 據說文韻會之正義而調五言七言之
 和訓要者何連可成數國者之狂詩咸
 表貝師之狂歌矣耶多見羅山之七字
 城了則其言取漢語以詠我朝之事而
 此可為骨彼可為飾與者一言萬當之

凡例而謂為盡大和真名之要矣夫學
 彼人者可恐此不恐此人者不學彼了
 增而謂大音之凡俗則此物以人尔麼
 為先教誡之情而為後文章之姿了則
 花鳥之優游尔者為厥樣也其盡實情
 之餘連加陪助語副止手右之情者隨
 天理居今之情者噫人理歷爾有則温
 情之故而知姿之新了哉漸從李唐之
 詩人增而至趙宋之作者則詩尔者除
 助韻之字而五七之間不費言葉見習

其身其終之名人而巧一字一言之妙
 欲含無量之情若似童部之屈言傳而
 有甫人麼推量之沙汰也乎實夫我朝
 者手不波國也則傲詩經之麟之皇矣
 而可用乎哉乎也之詞皇矣歌行之類
 者勿論之事也其內音韻與平仄之事
 者不知所用之道理共暫不肯古法耳
 也則假令遇兩韻之字時者可勿論用
 兩韻矣乎從本見為得詩聖之名杜律
 之五言七言了則平仄之不合麼有多

尔者向不知者而論不知事則夜麼月
 麼摸象之費也乎孰思以雅之變則詩
 者成騷騷者成辭而今者成詩歌與連
 俳了則和漢有面々之物教奇而諫人
 宛爾我宛從詞遣之虛實例知淋敷去
 與面通去則詩者唯遊志之行處而不
 如知言語之無用乎左者云些世詩之
 易學而黃白之給麼稍有世更成
 狂詩之思而不田干烟學文之人者成
 巴人薤露之和共向以而敷之則不堪

于白雪之詠，其誠恐而可學，誠學而可思者，唯是此詩之凡姿也。則凡情者，今之不及言，其于時元祿乙亥冬，神無月十二月，試製真名之詩，而其真故公羽之畫像者，爾也。

其真

東卷坊

此翁昔在武陵城，
蘭室得時櫻穀馬，
歌羞西上人臨渡。

野分芭蕉以雨鳴，
序山捨世竹樓鶯，
詩傲杜工部寫情。

和漢文章誰可敵

假名不必隔真名

○評云此詩ハ婉靡ノ法ヲ以テ和漢兩用ノ作在云云。持スルニ一二ノ起句ハ祖翁嘗テ武江ニ遁テハ芭蕉野分シテ盟ニ雨ヲ聞夜哉ト其世ニ郷音スル發句ニテ芭蕉菴ノ名モ此特ヨリトヤ然レハ前對ハ一語ノ榮落ナカラ向氏文集ノ詩勢ヲ假リ後對ハ一生ノ夙雅ニシテ常ニ西行ノ山家集ト杜律ノ五言トヲ持アキ結ル信古ノ實情ヲ顯セルナリ。此故ニ七八ノ結語ハ假名ト真名トノ通用ヲ稱シテ遠ク祖翁ノ遺命ヲ傳ヘ近ク我師ノ本懷ヲ遂ナリ。

贊雪中柳

此繪使人思古詩

梅花未識竹先知

知_ル不_レ識_ラ孰_レ爲_ル愈_リ 柳_ハ氷_ニ凝_レ被_ル雪_ニ推_カ

○評云此詩ハ墨詔ノ格ニシテ法ニ換骨ノ絶妙ト稱セン去ルハ
臺山ト夜雪ノ句ヲ假リテ覺_ル字ヲ識_ル字ニ換_ルハ例ノ
臆_ク句ヲ思_フム時ニ詔路ノ拍子ヲ調_シ爲_スナリ増_テ孰_レ愈_リ
トハ論語ニ知_ル字ノ裁入ナリ然_レハ梅竹ノ知_ル不_レ知_ルヨリ
柳_ハ知_ルナカラ雪ニ推_レ居_ル人ニ利_ニ鈍_クノ用ヲ知_レトニヤ詩ハ
誠_ニ此_レ等_ノ詔諫ヨリ孔子モ常_ニ勸_ムリ_テ此_レ等_ノ濃_ク
野航亭ニ在_リテ祖翁ノ竹_ヲ繪_ト同_ク十_ニ龍_ス柳_雪堂
ノ標号_ヲモ此_レ時_ノ稱_ナリトフ

詠_ス懸_ル松_ニ薺_ヲ

何_レ不_レ朝_ル顔_ヲ知_ラ我_ノ秋_ヲ 松_ニ憑_ル千_ニ歲_ヲ幾_ク程_ノ秋_ヲ

凋_ル時_ハ可_レ恥_ツ祗_ニ王_ノ意_ニ 莫_ク恨_ム不_レ知_ル白_ク雨_ノ路_ノ秋_ヲ

○評云此詩ハ之韻一協ニシテ詩意ハ註スニ及_ハス祗_ニ王_ノ神_ノ女_ノ
カ四_ノ路_ハ暖_ク暖_クノ祗_ニ王_ノ寺_ニ在_リ發_ル心_ノ歌_ニ明_ク出_ル生_ル
枯_ルハモ同_ク野_ノ邊_ノ草_何カ秋_ニ交_ハ連_テ果_キト誦_ス
テ佛_佛前_ヲモ恨_{スト}然_レハ此_レ詩_ノ之_レ韻_ハ其_レ歌_ノ意_ハ
摘_テ秋_ノ一_ノ字_ヲ運_ルナリ首_ノ句_ト落_ク句_ト不_レ知_ルニ字_ヲハ
連_能ニ云_ル同_ク字_異訓_ニ此_レ等_ヲ和_シ詩_ノ凡_レ例_ト知_ルレ_シ
不_レ知_ルモ莫_ク恨_ムモ万_ノ葉_ノ孰_レ詔_{ナリ}

戲_ル俄_レ道_心

四_十八_枚頼_ル 終_ニ成_ル紙_ノ子_ノ坊_ト

與凡憎若繁

每物遣淺黃

肩些有伊達

心曾無化精

宛尊初雪且

立不取梅香

○評云此詩八全ク大和ニシテ四十八願ノ仏語ヲ假テ綴リ縁語ニ結スルハ戯ノ一字ノ詼諧ト知レ按スルニ此法師ハ歌舞ノ遊興ニ千金ヲ尽シテ若道心ト成ルニヤ若繁ノ二字ハ其所縁ト同ク此故ニ七八ノ結句ハ初雪ノ句次ヲ以テ梅香ノ句情ヲ含スル一篇ノ凡雅ハ此二句在リテ立而不取者其由也興ト云ル論語ノ詞ヲ裁入スル詠者ノ虛實ハ更ニシテ又ニ摘採ノ絶妙ト稱スレ増テ梅香ハ絆子ノ鼻ニ敵シテ一篇ノ起結ト知キナリ誠ニ真名ノ詩鑑ト云レ

頃目從二竹丈人祝七夕之節供

而被贈一束紙一束多謝每歲之

恩而聊寄回情而已

一束荷恩何若輕思君四百八十情

誰知一筆軟於萩音信不諱文月名

○評云此詩ハ大和ノ凡躰ナカラ論セハ連歌ノ優情ト云ハシ十帖ノ絆ヲ枚々ニ分ケテ四百八十ノ恩情ヲ荷フトハ誠ニ微意ヲ尽セリト云レ然レ三十字ヲ時深坊ニシテハ春風ニ而九十橋トモ南朝四百八十寺トモ其類ヲ長安ノ語音トカ註スト我朝ノ人ハ語者ニ通セス何ノ道理トハ知子任古法ニ任スル例ノ故實ナリ去ハレ四ノ結文ハ全ク和歌ノ詞ヲ摘テ

定家卿、神無月ヨリ、緋ニ文月ノ各ヲ寄セ、此後ノ者信毛
 和歌ノ向、類ニテ等ニ和漢ノ通用ヲ稱ス、但レハ南ハ、北
 類ニテ、美濃ニ封緋ノ名産ナリ、二竹ハ戸田家ノ武士ニ、濃ノ
 名崎ニ嘉道セリ、先師ニ膠漆ノ旧友トシ、拵スルニ、ハ、ハ
 ノ詩ト、俄道心トノ詩、躰ハ大和ニ連俳ノ二様ヲ、尺シテ、ハ等
 ヲ、真名ノ詩鑑トハ云ハシ、然レハ祖公羽ノ、恐レ玉ハ、狂詩狂歌
 ノ難ヲ、適シテ、多ニ雅俗ノ常用ヲ知テナリ

右ハ五首、者之禄、之新製而

燈花詩、叢之附録也、左有、厚

再撰、文擇而為、大和真名、之

濫觴、後人、宜歎、可勘察也

真名詩類 雜題

和栗山氏詩

林道春

有雄ハシメ又有雌ハシメ 此氣浩然トシ在モ口レ言ヒ

雖下古ハ神代ト春來カ者 東風吹寄スル自天原

○評云、此詩ハ羅山文集ニ在テ、殊ニ我神ノ始ラズ、ハ、多ニ
 真名ノ詩ノ首、ハ、トセリ、然レハ、ニ詩ト、歌トハ、詔路ノ拍子
ニ、抑、遠アリテ、俣詔ヲ用テ、漢詩ト成リ、漢詔ヲ用テ、ト
俣詩ト成レ、ハ、ハ、等、ニ、後、君ノ評ヲ待テ、詮、ハ、取、ハ、狂詩ト
能詩ト、ニ、一、歩、千、里ノ好、西ヲ知レ、トナリ、拵スルニ、言、詔、拍子
ハ本ヨリ、能詔ノ自用ニシテ、和歌ニ、五、七ノ、出、云ヲ知テ、ハ、能詔

三四ノ文法ヲ立ルハ例ニ似ルノ意地下知レ然レハ詩ト云イ
文ト云イ五七ト四六トノ拍子ヲ知ルハ和歌ノ優情モ俳諧ノ平語
モ雅俗ハ言々ニ知レキナリ

秋風像

蓮二房

世傳、此老翁
今見何難面

越路恨秋風
松残夕日紅

○評云此繪ハ松ノ木陰ニ老僧ノ杖ヲ推ルテ雲ニ文ハ日照
ヲ詠スル躰ナリ去ルハ芭蕉先云羽ノ越路ノ行脚ニ赤々ト
月ハ難面モ秋風ト詠セシ旅行ノ愁情ヲ引替テ今見
レハ景色ノ面白ヲト轉シテ答ルモ作者ノ活法ナリ此等ニ
意地ヲ知テ之其繪ハ越中ノ倚齋亭ニ在テ知ニ舟家珍ト
セリ

戲影法師

水陳人

木端影法師
終元獲既整圍

盃取夜寒
無當非玉危

○評云此詩ハ例ノ詠詠ナカラ徒然州ノ意ヲ摘テ今法師ノ
無風雅ヲ詠諫セシ身ヲ木端ニ捨果テ月花也ヲ寄寓
セハ玉危モ當ナキ心地ヲト全篇ニ月ヲ含ム隱見ノ法
ヲ見キナリ結句ハ木端ノ擊テ玉危無當雖非用
ト云フ文選ノ詞ヲ採ル非字ノ影畧ヲ互見スレ去レト
當字ニ平仄ノ論ハ例ノ兩韻ニ任スキナリ作者ハ尾陽ノ
素水ニシテ水陳人ハ標号ナリトフ

謝初茄子

作者八慧庵記
ニ各録アリ

土方堅

含露^テ飲^ク菴^ノ鮮^カ
我^ノ鄉^ト何^レ為^シ酒^キ

更^ニ思^フ紫^ノ所^レ綠^カ
日^ニ瘦^セ不^ス嬾^シ始^ナ

贊^ス鳥^ノ羽^ヲ繪^シ之^ヲ蒲^ノ首^ヲ吸^ク

渡^リ白^ク狂^ク

舉^テ吸^ク蒲^ノ首^ヲ何^レ國^ノ僧^ト

足^ハ如^ク電^ノ馬^ノ只^シ如^ク蛙^ト

盜^ム時^ニ有^ル好^ム威^ト童^ノ部^ト

夕^ニ遇^フ裁^ノ園^ニ可^ク振^テ疾^ク

他圖ハ洛ノ全暇筆ナリト詩ハ詠諧ニシテ註ニ及ス其繪ハ濃ノ六之亭ニ在リ但裁園ニ百菊ヲ移テ高卧即ハ自稱ナリ

△假名用真名韻序

並詩

康安道

我^レ聞^ク諸^ノ越^ノ之^ノ人^ト者^ハ作^レ詩^ヲ了^シ共^ニ不^レ能^セ他^ノ國^ノ
之^ノ歌^ヲ大^ニ和^シ之^ノ人^ト者^ハ誦^ク歌^ヲ了^シ共^ニ不^レ能^セ彼^ノ邦^ノ
之^ノ詩^ヲ假^シ令^ヒ詞^ト者^ハ有^ル音^ノ訓^ノ之^ノ違^ヒ麼^ノ情^ノ者^ハ何^レ
連^テ隔^テ和^シ漫^ク矣^ト聞^ク則^チ高^ク麗^ク人^ト麼^ノ馴^ク大^ニ和^シ歌^ヲ
而^{シテ}誦^ク我^ノ唐^ノ國^ノ之^ノ妻^ト所^レ感^シ敷^ク琉^ノ球^ノ人^ト麼^ノ遊^ク
筑^ク紫^ノ而^{シテ}詠^ク紅^ノ葉^ノ赤^ク洵^ク之^ノ夕^ニ自^レ泉^ノ矣^ト皆^ク
只^シ為^シ以^テ雅^ク之^ノ通^ク情^ノ厚^ク故^ニ初^ニ社^ノ所^レ聞^ク彼^ノ邦^ノ
之^ノ詩^ヲ經^テ者^ハ通^ク我^ノ朝^ノ之^ノ万^ノ葉^ノ集^ク居^テ唐^ノ詩^ヲ之^ノ

凡有為似古今集與哉詩者本通和漢之志了則也今者六歲之先也季儂東有桃花老仙而奈何捨我國之易讀假名而學他邦之難知真名耶迎新製平假名之詩而令盡漢家之詩法者誠謂本朝之文鑑者矣於茲不恥我拙頃日送蓮老師之歸美濃迎為假名之詩用真名之韻止乎老師稱其詩曰先師昔有奈猶文而斯所交和漢之韻今也以世詩之格可謂万葉之韻與所誠哉

如放之文之箭而獲八百之鷹率夫不謂徹律季耶仍以爾云

招よおのくれ年とあり霜 おあお秋の旨とありかき
ほれあふもふれふあり葉 くらけ時あのみとあり葉

享保甲辰の歳且一削の詩とあつち
とて合て万葉の韻とあり一冊の撰也

園君と祝へ下 藤守道

去心よりと袖はけし著 くらけ時あのみとあり葉
我あふ心と袖はけし足 くらけ時あのみとあり葉

おあしぐ万葉解とて
そくし反教の字とてらむ

毛物子

天はみちのくさやみか
草のそよこはるはくせん
我らありと此れをきふ
現の海は波とてあはれ

○評云右此之首八万葉韻ノ濫觴ニシテ或ハ音ヲ用イ

或ハ訓ヲ用ユ去ル其書ニ跋渉シテ多ク古例ニ據リヤ
字ヲ人ハ削ノ狂簡ヲ恐テ作り作者ハ賀ノ金城ニ住シテ
カクニ
庶熊ヲ姓トシ守道ヲ名トス本ヨリ詩騷ノ逸人ナリ
トウ毛物子ハ橋姓ニシテ俳名ヲ侶鶴ト云フ金城ニ教習
ノ名ヲ稱シテ編行官家ノ人々モ友トシ学ヒスト云フ皆
嘗テ先師ト虚実ヲ論シテ書通ノ遊敵ナリトク

享保甲辰の夏あしぐの万葉の詩とひらき
まゝ二字約の熟語あしぐと柳子庵の例の遊民

とちやてり月雨のおはれ
はくろりげきと二字約の熟と製と

田家憲

蓮二房

はくろりげきと二字約の熟と製と
花はかみんのもやま
後めはれはれとて

○評云此体モ万葉ノ韻ニ似テト多クハ訓ニシテ音ハ稀
ナラン然ルモ此格ノ要スル所ハ和漢ニ字ノ孰シ語ヲ尋テ
私ノ韻礎ヲ作テラス在ト不狂トハ此壞ナリ按テ露濃
ト雅俗通用ノ平語ニテコイモケレ例ノ通語ナリ俗中
ノ二字ハ日本紀ニ出テ歌歌ハ万葉ニ在リ斬通ハ真名

伊勢物語ニカハシラカシトハ例奥語ナリ然レハ浅香花
カウニト詠レ影副所見山井乃ト誦ル總テハ古歌ノ
裁入ニテハ等ヲ二字韻ノ鏡ニ見ルレシ去ト思
糸瓜に俗習ニ用ク来レ故宮ノ詞ハ論ニ及ハズ但ハ
自己ノ作トスラ庄或ハ古文ノ例ニ效ク或ハ文字多ニ據リ
或ハ字訓ノ郷音ヲ假ラハ却テ奇絶ノ作モ有キナリ
其等ノ設ハ大和詞ニ見ルレシ

ミコノ月ノけりも若山の蓮作より真名各
ニ字初しあはれり思の一章とありけり
ありぬをまゝとてありけり思の一章とありけり

怨七ノ入意

麻安道

ミコノ月ノけりも若山の蓮作より真名各
人の子ノ入意ありけり
いづれおとちきりけり

○評云此詩ハ恨意ナカラ逢不逢意トヤ云ハ誠怨情
ノ的白ナルハ等ヲ俳諧ノ微中ト賛シテ和歌モ尽シル
所ト稱スレ按スレ浅猿ハ例ノ假訓ニ意ヲ運ヒテ
ハ類ヲ大和ノ右文ト云イ虚言ハ常詔ヲ論及ス然レ
ニ葉葉ト係ト極トハ全ク作者ノ働ニシテ葉葉ハ根葉
ハ例ノ俗習ナリ況ヤ淺猿ノ古詔ヲ假ツテ物ヲ添ヘ
ニ據ル字訓ノ郷音モ文字ノ多モ此等ヲ自作ノ絶妙ト稱スレ
右方より又首と文標より新制表の二口也前の二首
と下葉韻と以後の二首と二字韻とより畢竟ハ
末韻の要なりて作も不作も向ふるべき也

老圃詞

岸昨裏

我とかいど人のるり可圃
腰ふくむ此きひきき来品

露よ志とれいさのあ相瞳
おとちの世いふ向の而云

祝竹餅

桐丸角

あまをとて思ふいとよみ廉
名も管の此のりりり刺

茶をよみの餅はは鹽
けふむよりのとね兼

○評云此詩モ方葉躰ナカラ稱ス所ハ之四ノ面通味ナシ
厚餅ノ撮ルラ管ノ振ニ喩ヘ芋頭ノ踏タラヲ轉ニ喩

去ハ俳諧ノ叙客ナリ況ヤ花ヨリ團子ハ民間ノ俚語ナリ
ナリ然レシオニ韻ノ鹽字ハ假名遣ノ論アルニ庵ト云
類ト云イ擡ル字ハ總テホノ字ヲ用タ下故又シテ道理ナキ
故ニ我朝ノ字書ヲ見レバホレシヲ假名附アリ物ニ假名
遣ト云フ又ハ定家卿ニ後ノ沙汰ナリトヤ道理ノ知レヌ
夏多シ然レニ兩韻ノ序説ノ如ク其字ニ其理ノ明ナラヌ
ハ時宜ニ隨テ用キニヤ例動家系スニ作者ハ三方樓記ニ

喜亡文晴

池二川

今宵の昔此の風もあつた
世に此ちきりいりもく
年のおあやめあはれ

まづはくちをよみやみき ちよみ詞のほもあるか
我もねらふの衣かきまき ねまてえねあけぬれ
○評云此詩毛律法ノ新制をシテ例ノ大和ノ一格トヤ云シ
一三八言ト櫃トヲ以テ漢三前對ノ法トカラ中間ノ二對ニハ
文ナラ對セス黄芦和溪ノ四字ヲ以テ世等ヲ意對
ノ絶妙ト稱スヘシ但ヤ假名ニ直ニ各ラ附ル催馬樂
ノ古制ナリ作者ハ越中ノ富山ニ住ス池田氏ノ家ニシテ
先師ト北蘭ノ友ナリトフ

雜題

假名詩類

二果好法師賛

表花仙

現はくちり静ちるさ海と かねりもは原もるも
あ都のたもよ途ありし 本曾の月と袂たあまむ
草の一言に伸直さるひ 平の子のよと感思いあまふ
木を事さるゑんを切まや ほれく叶の種をさあめり
柳後園、屋露 専文人、洛ノ吾仲ニ
詩歌時ノ狂名 馬ヤ人
柳のふれおしとれつと ちんらんもあまふちから
むのらくりもむのらるむ けをさのまをさしとまや

急文ニ牡丹

作者ハ枚子頌ニ
名録アリ

伊東怒

牡丹と鶴とありとあり 猶も木陰に身を隠すはれ
我を愛ふ心のひかりを 心のちり花の影にまはれ

詠^ス梅^ヲ

高花把

梅よ えひけ みんあはれえこ
雪に 後ろそと 春あきあう
園と あやあし きれうらうむ
雲に 香とある あうはふおをれ

此詩ハ唐ノ李太白カ五七言ニ效テカラ和ト漢トニ
音訓ノ差別ヨリ句ノ配リノ違同ヲ見テ作者ハ
高田氏ニシテ尾城下ノ逸人ナリ

擬^フ古^ニ

作者^ハ文基^ニ序^ニ
姓氏^{アリ}

張昇角

松と竹との大路をいけい 如きしあはれを月夜
孔と神代のかしら振りて 録のまきちりかきあはれ

筆

此詩ハ方葉假名ヲ假^{ツテ}
都^ト金^ト時^ト雨^トニ^テ三^ニ對^ス
大和ニ對^ス類^ノ格^ト云^ハシ

岸昨裏

るよとらあめのもちあひひ 夕子と傳ふ世はさあ
はしつれあはれをかぶりー 足あはらあはれはさあ
あはれいゝあはれあはれやまは 竹あはれあはれあはれ
そとやあはれあはれあはれ いくあはれあはれあはれ

嶺ハ傾城ヲ 作者文鑑ニ姓アリテ
黃山下ノ隱士ナリ 渡右範

必と云ふの意入るひて ちりて此のまじりしれ
まじりてのまじりあはれ 後めいしおあはれ

對花感老ヲ作者越安居寺ヲ
辭ト其麓ニ嘉道僧音吹
ス南居ヲ柳明著ナリ

まじりてのまじりあはれ 山と花とまじりて
まじりてのまじりあはれ 山と花とまじりて

民詞 作者文鑑ニ各録アリ
獅子行ノ親族ナリ 各東羽

此も花のまじりあはれ 山と花とまじりて
あはれれぬ病とまじりて 我もまじりて

算 擬古詩 渡白狂

宿のりま名に梅と宿や 竹と花のまじりあはれ
梅と花とまじりあはれ 竹と花のまじりあはれ

○評云此詩一字之韻ノ格ナカラ梅ト竹ト四句ニ配リ又ハ
古詩躰ト云キナリ本ヨリ一字之韻ハ漢家ハ多ク下
和訓ニ語路ノ分ケ難キヲ疑辭ト云ク嘆辭ト云ク口合
ノ之別ヲ以テ之段ノヤノ字ヲ用ヒタル例ニ天和ノ新制ト
云ハシカレハニ等備ノ註スル所ハ算宿梅ノ古詔ヲ假テ算

一子ヲ含スル格ニ隱見ノ絶妙ト稱スキナリ

師走朝霞

仙里紅

方々松栢の露に色ぬ 喜ぶら顔北極へ鳴て
園より木の枝も越れぬ 世と去る川に漕ぎて

○後云詩ハ黄鵠園ノ歳暮春ニ賦メノ魚鮓十カラ梅ニ
ハ暗部ノ古歌ヲ摘ミ白川夜船ノ俚語ヲ採テ誠ニ俳諧ノ
滑利ト稱セシ作者ハ柳川ノ十折ニテ摺ハ木歳ニ各録

松茸狩

松丁牧

秋の時南北にある 暖液の心く物くら

此和じし神の意とゆふ けふは金此柄とてけ
せし中園の噂やせし けふ成りてはけふの心
遊路の時も海をひき 色をとりて紅雲とてけ

○評云此詩ハ全ク賦鮓十カラ後對ハ例ノ寓言ニ似ルト
暖液ニハ中園カ中智ヲ喚出セル様ヲ寫シ茸狩ニハ
成盛ニカ松殿ヲ爾レ乱舞ヲ令ム然レハ西行ノ歌ヲ
起句ト成レ樂天カ詩ヲ結句ト成セル和漢ノ操ハ更ニ
シテ總テハ採文ノ絶妙ト稱スレ作者ハ尾城ノ武門ニシテ
近松ヲ自トシ茂経ヲ各トス其祖ハ義濃ノ山縣ニ産シ
北野天神ノ氏子ナリト今ニ軍法家ヲ練兵堂ハ稱号ナリト

戯花

作者ハ能登ノ七尾ニ住ス
山城ノ優人ニシテ同鮓ト
混中ノ友ナリト

山名長羽

むし福もねらむも福なり
むし福もねらむも福なり
むし福もねらむも福なり

笠

作者八州羽生ノ凡人ニシテ
尾城下ニ放遊セリ

冊以之

蓮の葉のまゝとてきよによくと
あはれとてあはれとてあはれと
あはれとてあはれとてあはれと

鏡山詠四季

林有琴

水と岩との如く山後
水と岩との如く山後
水と岩との如く山後

席のついでに袖あはれとて
席のついでに袖あはれとて
席のついでに袖あはれとて

〇評云此詩ハ全ク賦体ニシテ四季ニ面詠ノ分明ナル誠ニ風景四絶

ト云ハ但し鏡ヲ鏡山トハ各詔ニ似テ郷談ナリ其山ハ長良ニ
名高キ稲葉山北面ニ遠目テ例長良川ハ東西ニ横フ摺ニ
螢ノ花和ナル席ト枕トノ物淋キ国ニ通双ノ各蹤ト云ハシ
然レ此詩ノ評ニ処ニ鏡ノ風流ヨリ四季モ長良ト詞ヲ繋キ
国ニ美長ノ各ヲ並ヘテ結句ニ詔詔ヲ用ヌルニ等ヲ十成俳詩
ト稱スレ作者ハ今ノ長良ニ住ス泊楓老人ノ長良カニシ林仲徳人

詠蓮

作者八州中ノ城ヶ端ニ産
シテ市中ノ隠者ト稱セリ

其風子

むし御のお腰をきり
むし御のお腰をきり
むし御のお腰をきり

拙劣の得此 霞 ありとて 我に此世の事とありありと

梅嫌

作者八園論ニ各録アリ
嫌ハ庭ヲ和訓俗習トク

岸倚度

新はばよしくむとありとて 言ふと此の事とありとて
梅の白とありとてとて 我より此の事とありとて

悼水園公

蓮二房

越のきとて此の世にありとて 世とありとて川の事とありとて
月の入る家の水とありとて 瓦やおぼせ此の事とありとて
武と景とありとて梅とありとて 文と頼政の事とありとて

けしむるはとてありとて 我しりてよとてありとて

○評云此詩の風情あり和漢ニ通用ノ鑑トヤ云シ
去ハ前對水ト行ト其地ハ竹林ニ河水ヲ廻シテ屋敷ヲハ
水園館ト云イ茶廬ヲハ此君菴ト云フ其館ノ各勝ナリ
トノ後對ハ文武ノ稱ニシテ其名ノ風流ヲ添ナラ花ヲ咲スル
トハ本歌ニ敵シテ誠ニ翻轉ノ絶妙ト稱スレ況ヤ七八結語
ニ冥途ノ身ノ名ニ寄セテ同シ道ニト志ニ慕ハル近ク朋友
ノ信ヲ尽シテ遠クハ生死ノ道ヲ忘スト云レ此公ハ金城ノ
駒ノ子ナリ終末ノ記ノ筆第ノ註ニ互見スレ

晚望

作者八園田中ニシテ信ノ善見
寺ニ住メリ獅子内ニ書通ノ俳士

云未格

山をばにけしむるはとてありとて 孤村の月の水とありとて

酒はたきとにりきあきぬ ちよ葉の雨は成りぬち

松讚

此松ハ智ノ金城ニ在リテ作者ハ
豆田氏ナリトシ錫文評ニ互見シ

豆田曲

代く此等世の成る ときとちるねれり
吾とあのか旅此新 雨もやらり物此葉
以もきつ了掃あつて 吾もたむむ観あきと
むしららびあものこ りのこもの成りし

薊花

水陳人

あは京此町もあつてく 角とあを色も川はも

肩をよおしあきぬ男の 涙は成れぬあつて

業平、昼賛

予前ノ自筆ハ
東帯ノ像ナリ

花仙

むしねとあつてきり けしきもにらかき
あき川もあつてきり けしきもにらかき
あき川もあつてきり けしきもにらかき
あき川もあつてきり けしきもにらかき

待石意

作者ハ羽ノ鶴園ニ在リ深沢氏ノ
優人ニノ吾仲在角ト書通ノ

次山七

けり園もたきと吸あき ぬけり物も成りあき

一尋しし下らむと流る世はくも 下の敷と指とあれとや

寄録意

松丁牧

向と梓と此を多かれとせむと 今月いかに此を流るは
まきと孫の前此かたれとせむと 君と孫の此おれとせむと

挑灯吟

作者ノ兩名ハ捨録詠ニ
世詩ニ京師ノ作ナリト云

陳素六

世とぬらくと猿とあれとせむと 力と流る孫の字各まきと
月あつとまきと流るは挑燈と 世のあつとまきと海と
あ月の元めくおれとせむと 世のあつとまきと海と

僻の小川の流もたらしとや いつと踏あけ此流とあつと

四季詠

作者ハ長野氏ニ越ノ新深ニ
住ス長路雪洲カ京才ナリ

長北柱

我が鳥起とせむとくせむと 何なるも月とまきとあつと
吾の火燈此むとあつと 月と流るは挑燈とあつと

去者日跡

馬文人

よの中此世を去るとあつと ひとり来りてひとり去る
麻柯の榎とあつと 蓬葉此世とあつと
刺鱗の孫とあつと 抹香の御ときとあつと

今そある鴨川北 東とある河とありぬ

年賀

無名八陣の標字ヲ讚詠ノ
一夜菴ニ住ス常鑑の跡ナリ 而老坊

じやー難者此喜に逢は 我らむ朝の梅も咲きむ
早のゆりも松もたけりて ちよふつと新舟ちり

鴨舟遊覧

作者童平ニ名ハ文鑑
ニ下リ八尋ハ家ノ能師ナル故ニトク 梅長者

水月のはけしち伊勢の八尋とりのあまむし夏の
新舟の挨拶とてくくんの風爐もすけとてとて
朽も毛纏とて荷もくんと大炊川の川幸にたの

わねそわねの風爐とてくくんと飛船のとおきり
新舟の挨拶とてくくんの風爐のまうしあむん
とて新舟の挨拶とてくくんの風爐のまうしあむん
とあむん今新舟とてくくんの風爐のまうしあむん
の文はあむんあむんあむんあむんあむんあむん
清く新舟の挨拶とてくくんの風爐のまうしあむん
春風も清くあむんあむんあむんあむんあむんあむん
新舟の挨拶とてくくんの風爐のまうしあむん
あむんあむんあむんあむんあむんあむんあむん
あむんあむんあむんあむんあむんあむんあむん

遊女伝

伊東怒

けり森の肌さむく
 節もとまきおれ
 けりけりさむく
 手もさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく

恨別 世詩尾城作今各ラ出
セリト撞餅記其評アリ 仇麦士

けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく

呵猫 首尾吟
 岸倚彦

金婦く 加とさき
 あらみ みとみ
 嵐と まき
 せし まき
 金婦く 加とさき
 あらみ みとみ
 嵐と まき
 せし まき

雨 雨意 鰯 鰯 牛 牛
 豆 豆 凡 凡 曲 曲

けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく
 けりけりさむく

野馬琴

老花仙

まの野馬をねらひて
きよきうららけをきか
しよのたれはれはれは
たのあまのひめときるあま
きよ珠洲の所牧あねを
きよのあまのあまをきか

寄團扇意

高花把

團扇を人の袖にあらはく
風のきこられはるるある
よと板のせき言ありと
きよのあまのあまをきか

越の巴より舞の境りとあま
の山中に舞はれはるるあま
はれはるるあまのあまを
あつあつあまのあまを

蓮二房

舞をきかあまのあまを
あまのあまのあまをきか
あまのあまのあまをきか

蓮二房の舞也

得巴下

得巴下

松よひきよあまのあまを
あまのあまのあまをきか
あまのあまのあまをきか

○歌類 雜題

壽老人贊

正親町 公通

はくくしんれいしんがまあは海哉
今ふく我しあのいんくをく

いし字紙の掃くつらき言

しんまのいしん使し少猶 宗鑑法師
いしんあつしんく

まのあし連しんれいしん海揚
つれしんまのいんくあつしん

題不知 世坊蓮蓬翁ノ稱名ヲ
得テ之越ニ名高キ道心 秋々坊

焼くたしん原のぼろしんあし
あやあけらららららきしん

白髮吟 蓮蓬 芭蕉翁

はくしんあつしん武陵らららららららら
の海しんあつしんあつしんあつしんあつしん
たあつしんあつしんあつしんあつしんあつしん
のあつしんあつしんあつしんあつしんあつしん

騷論ニ世等ノ才實ト察スレ音韻ハ暫ク古法ヲ守ルノミ
 總テ推量ノ沙汰止ハ後ハ例ノ郵察セヨ初ニ備ノ註スル
 所ハ其ハ一扇ニ寄セテ逢字ノ縁語ヨリ班チカ恨タレ古語ヲ
 假リ其ハ二故郷ノ例ヲ見テ法顯ノ歎キレ故吏ヲ合ス其ハ三
 ハ便面ノ詩歌ニ残リテ人ノ記念ノ果敢ナキヲ云ク其ハ四ハ深
 奥ノ生別ヨリモ今ノ死別ノ悲心ヲ云フ其ハ五ハ市廣ノ詞ニ敵テ
 四ノ定ナキ有様ヲ云ク其ハ六貫之ノ歌ヲ摘テ世世ノ取キ別
 ラ云フニ招魂ノ二字ハ追慕ノ親切ニテ一編ノ骨節ト知
 ケナリ但シ世扇ハ越ノ俗ニ傳テ而索存ノ家珍ナリ所々
 ニ傳写ノ違モ有ヘシ

辞世詞

宇治通圓

一服一錢一駒中
最期一念云脚法

ウツクニヤメリキテスレクモホ

ホホキレホホキレホホキレ

佛奉養歌

苗草陀

牡丹とむの玉とてとてと 強々かきわめ雲のさかひ
 山くすと流るむとてとてと 手あはれあやむれとてと
 三珠とむむけのえとてとてと あり袂のほのけとてと
 ちやとむむれあやむれとてと けをけけとてとてと

るりかし世や何かくり ちるし此るのちもあはれし

○評云此歌ハ樂府ノ左躰ヨリ十句ニシテ互韻ヲ用テ去ハ隣對ノ法ナカラ論セ大和ノ新制表ト云ハシ去ハ二篇ノ稱スル所ハ其師尚白老ノ生之則ニ事ヲ愛セシヨリ今ハ西行ノ櫻三膳リテ廟前ニ此花ヲ奉リケントク作者ノ姓氏ハ勿論薛ニ出タリ

挽歌 並序

渡白狂

我日ありきる人の子此時をくめえやまれいし
長しうあいきらしきまきしあまの宿めゆか
るの月影のみに泣くをぬはれと我所の勝あれ
てあの侍屋戸のうらよ猿の子はあちのけしをふ

詠つてあしきつわねしはれしものあはれい
て蒿^{ヨヒキ}此風もあつねゆ道のまはる此風のぬけ

せうれくくおいしきまきしあまの宿め
きりくくをふらうしきりきりまきしあ
やまらまらるるし 舟のゆらふ

○評云此歌モ樂府躰トカラ前ノ之句ハ七五ニ韻ヲ踏之後ノ
一句ハ七々ニ韻ヲ踏ムをモ和歌ノ韻法ニシテ總テ八句四韻ナ
本ヨリ樂府ノ常法ニ發諸ラ句外ト成セヨリ和歌ノ末韻
モ五又ウチハ言捨ナリ然レ六此等ノ歌ヲ以テ和漢通用ヲ稱ス

比紅尼曲 此曲ハ例ノ新制表ニテ此等 山岸昨襄

むうハ麻此のり此花をい かくとむらひ福倉うりに

あまのせむらひもさや 鹿とくぬの懸あまのせむらひ
 暖磯のちりしれ神のちりしれ 服部あまのせむらひ
 四神あまのせむらひもさや 夕のあまのせむらひもさや
 いまのあまのせむらひもさや とおのちりしれあまのせむらひ
 世と秋風の同じあまのせむらひ よのちりしれあまのせむらひ
 万のあまのせむらひもさや 月とあまのせむらひもさや
 花も神とのちりしれあまのせむらひ 腰のちりしれあまのせむらひ

七文帳和讃 之首

百阿佛

阿彌の神もいしあまのせむらひもさやあまのせむらひもさや

のちりしれあまのせむらひもさや
 けしあまのせむらひもさや
 阿彌の神もいしあまのせむらひもさや
 ままのちりしれあまのせむらひもさや
 ままのちりしれあまのせむらひもさや
 ままのちりしれあまのせむらひもさや
 ままのちりしれあまのせむらひもさや
 ままのちりしれあまのせむらひもさや
 ままのちりしれあまのせむらひもさや
 ままのちりしれあまのせむらひもさや

○評云 礼讃ハ序少ノ遠法師ニ始リテ太夫奉ノ善観音ノ節
 ヲ附至ニ我朝ノ声ノ明ト成セリ其意ハ仏ヲ讃歎ノ和歌
 ニ咏嘆ノ類ナリトフ然レハ此讃ノ趣ハ人間ノ色采白ヲ

星ニ寄セテ人ニ無常ヲ示スハ應現婦子ノ仏説ヨリ菩薩
ニ天部ノ稱号ト知レ誠ニ佛説ノ疑クニ云レ詠為詠諫モ世古又
ニ遊宴中ノ哀手ヲ知レ下ナリ而阿ノ各ハ刺豎文ニ出
タリ

讀法華經

秋之坊

その時よとくちほりたれ女あ
とけとあふらひ抄所ちよくれ

故人庵茶歌

蓮二房

唐のやまもれらるる中は一平百のふりや
まよれ先せうかくそよし角行の動作捷是故人

来^ルる^カとらそりりも飲茶達めねしけり行よ
たつれもむしれれとけなめありと茶者のいれ
しゆあきかもし序らの南北漸しとまらひてたの
離^{カキ}め^キち^キと^キし^キま^キと^キま^キし^キい^キは^キあ^キの^キ一^キと
ち^キ久^キほ^キの^キゆ^キ此^キ空^キの^キふ^キし^キ唐^キと^キ中^キの^キ此^キ行^キと
括^キの^キし^キま^キの^キ程^キの^キ響^キの^キ事^キと^キり^キと^キ玉^キの^キ
新^キの^キ標^キが^キ茶^キと^キれ^キと^キち^キり^キく^キ此^キの^キ道^キの^キ道^キと
ま^キれ^キき^キあ^キら^キ茶^キの^キ石^キめ^キと^キつ^キね^キら^キは^キあ^キあ^キけ^キ
い^キ遊^キの^キゆ^キん^キれ^キし^キ痛^キま^キの^キか^キく^キれ^キい^キ茶^キ人^キの^キに
茶^キ枚^キと^キし^キあ^キい^キと^キて^キそ^キの^キ控^キ詞^キあ^キね

客スハ玉川モ茶湯ハ婦ト見タリニ碗以下七碗ニテ其歌ノ
 取急ナリ●同歌唯覚兩腋習々清風生云○貫之歌
 採ちる木のり花ををのびて見よまのれをををを
 嵐ノ通フト式子内親王ノ歌ノ裁入ナリ○新古今のあはれ
 けり山ノ入ノ麻のあはれ吹あくる萩のも風○孫子裁
 ぬさくおののうきまは柱つれ行もや思とんあはれん
 ●茶歌、結文、蓬萊山在何處、玉川子乘、清風、歌
 帰去、云、結語ハ以ノ一字ヨリ一篇ノ新續ヲ見レキナリ

○評云此等と如く行けり序全う茶歌と題してこれを
 起結新撰の句振子しかるを長短音の辨りてこれを
 し新撰の二格とてあしはれし行よ故人の記し李の
 了し李益とて作者よ両注のけはあれし例の後勤

一三也ルケ今篇の稱よりおと茶とほつた一節の
 こと地とたうし行と違てたに子代の祝言とありとい
 て句振とあましく和音の振子とありとて和音の
 濫りらんが長短音此辨とありとて色られ世ありとて
 源家の杉姓とて越の福赤とて婿官とて玄駁ハ能流
 のあまるとちりりて一暇のの音とて青了園とありとい
 て六松とて方印のなありとて

練漣歌

野盤子

野、棲、山、宿、野、盤、子、愁、病、何、為、拭、淚、頻
 桃、李、難、親、唯、一、日、雁、無、見、過、已、之、春

可憐重^ム茶^チ長^{ナガク}為^{ナリ}客^{キヤク}自^{ヨリ}愧^{ハズカシ}傳^ツ書^ツ遠^ク附^ラ人^ニ
 我^ワ甫^フ 夜^ヨ深^ク 扱^ツ木^ノ身^ハ墮^ル 日^{ヒト}莫^ク自^レ忘^ル家^ヲ
 子^コ罵^ル 嗟^ハ夫^ヲ 灯^ト火^ノ幾^ク年^カ傍^ニ母^ニ 香^カ烟^ニ
 影^{カゲ}月^{ツキ}亡^ク親^ヲ 君^{キミ}見^ユ 眼^メ滯^リ烟^ニ霞^ニ誰^カ可^キ
 憐^レ心^ヲ誇^ツ以^テ月^ヲ未^ダ全^ク負^ヘ起^キ来^テ好^シ有^ラ皮^ト與^フ
 膏^{コウ}獨^ニ可^レ以^テ雲^ヲ放^ツ以^テ身^ヲ

○評云此歌ハ灯^ト花^ノ詩^ニ最^ニ取^リ在^リテ天^ノ和^ノ比^ヲ作^リト誠^ニ二篇^ノ
 躰^ヲ見^ルハ趣^ハ漢^ノ家^ノ詔^ノ脉^ナナカラ意^ハ大^ニ和^ノ以^テ後^ト云^フ然^レハ
 此^レ類^ノ格^ヲモ傳^テ和^漢ニ通用^ノ鑑^ト成^サハ此^レ文^ノ集^ノ採^リラト
 例^ニ詩^ニ最^ニ取^リ中^ヲ透^ス来^テ此^レ一^ノ篇^ヲ出^セルナリ予^ハ趣^ハ意^ノ

差別^ヲ考^テ黄^白ノ紛^ヲ恐^キナリ練^漉ハ但^シ多^ク情^ノ様^ニシテ
 旅^亭ノ病^懷ヲ字^セル野^盤ハ先^師ノ名^ナカラ竹^宿水^樓ノ
 意^{ヨリ}起^キ句^ヲ我^ノ名^ヲ喚^出セリト右^ハ本^集ノ題^註ナリ按^スニ
 此^レ歌^ハ吳^融カ岳^山中^ノ歌^ノ如^ク七^六ノ句^法ヲ用^テニ斯^ノ發^詔
 ハ例^ノ樂^府ニ效^ヘリ然^レニ古^文ノ歌^曲ヲ見^レハ五^七ノ詔^路ハ和^漢
 ノ恒^例ニテ或^ハ九^七ノ長^短アリ或^ハ五^七ノ長^短アレト假^名ニ詔
 路^ノ拍^子ニ合^ハス多^ク音^訓ノ差^別ニシテ和^漢ノ字^向ノ遠^近同
 ナル先^師ノ詩^序ニ云^ル如^ク趣^ハ漢^詔ノ字^面ヲ飾^ルニ其^レ意^ハ
 和^詩ノ風^俗ヲ失^ハカラス然^レニ詔^路ト音^韻ノ沙^汰ハ譬^言ハ官^相
 江^州ノ智^アレモ我^朝ノ土^地ニ素^達スル予^者ハ漢^家ノ飯^燒ノ魚
 菜^ニモ方^リテ詔^路ノ長^短ト音^韻ノ可^不可^ハ皆^々推^量ノ苦
 工^ハ返^スノモ我^内ノ予^者ハ假^名ト直^名トノ通^用ヲ知^リ

○辯類

聖人^ニ才^キ及^キ辯

沃庵和尚

日向^{アケル}七^{ユロホヒ}却^リ来^テて天^ヲ見^ル神^ノ波^ハ
夏^モ衣^ヲ赤^ク物^ヲ遠^ク折^リし^ル録^ヲ
可^ク了^スを^モ彼^ノれ^ヲ余^ノり^ハ濃^ク
色^ニ能^ク弄^ス

戲^ニ才^キ之^ヲ與^フ好^ム了^ス之^ノ人^ニ

○評云世一^ニ章^ノ八^ノ聖^ノ人^ニ無^ク夢^ト云^ハ凡^ノ古^ノ語^ノ四^ノ字^ヲ題^シテ
世^ノ章^ノ賦^ニ書^キ置^キ玉^ルラ^シ多^ク辯^ノ一^ノ字^ヲ添^テ文^ノ採^ル飾^トハ

成^リテ^リ去^ル六^ノ世^ノ文^ノ子^ヲ評^セ或^ハ万^ノ葉^ノ旋^頭歌^ニ主^ト作^ル
ス或^ハ八^ノ庭^訓ノ直^ニ名^文ニモ^非ス世^ノ等^ヲ大^和ノ^辯ト^名附^テ例^ニ
文^ノ採^ルノ新^製ト^ヤ云^ハ誠^ニ世^ノ和^尚ハ^世ニ^勝テ^其文^ニテ^其實^ナ
ル^多ク^好事^ノ以^テ流^ラ見^ルハ^其世^ニ俳^諧ヲ^勤ル^本意^ナシ

刀虫^ノ辯^并序

苗宰陀

海^ノ館^ノ城^{あり}と^やも^國を^傳へ^給よ^のり^富士^の
も^{あり}の^り采^まね^あし^等よ^らし^振る^事や^や
宵^中ノ^茶向^とか^{あり}と^山と^越え^るカ^キや^り
の^ら雪^舟雪^村の^よし^はも^とあ^りの^歌

月し方とあるおひそに仲らあつとまげしが惚の
 垢といわゆで化すの意とく「塵はのり」の垢ら
 物といふもあまよはれは垢ははれぬとてをせはく
 山北はあつとまげし月てる意は茶の癖はあつと
 ぢらう脚布のまじらふとてはあつとまげし癖は
 まじらふ癖と飲食の天あはれ癖のよはあつと
 ひねらふとせられた太の歯はあつとまげし癖は
 不意の命とまげし有る癖はあつとまげし癖は
 風の熱湯とまげしと風はあつとまげし癖は

袴はあつとまげし癖はあつとまげし癖は
 の袖はあつとまげし癖はあつとまげし癖は
 膝はあつとまげし癖はあつとまげし癖は
 のしはあつとまげし癖はあつとまげし癖は
 あつとまげし癖はあつとまげし癖は

其辭

秋のおまむと何うもむ 春のあつとまげし癖は
 侍なるとあつとまげし癖はあつとまげし癖は
 故らとあつとまげし癖はあつとまげし癖は

表辭頭葉表辭樹與哉誠運和溪之情而
 多無感慨乘耶今將不佳吉之和歌共將競
 文章之哀與也熟思人之遊世則同好花
 鳥之色兮耳樂絲竹之聲兮棟其喬兮調
 其味兮此四者實謂意之馬車矣乍有
 此四者善用了則為樂人兮惡用了則為
 苦人兮物皆謂一得一失者矣于然謂人
 向之遺物者貴麼賤麼武夫麼商人麼有
 日々夜々之用而與齒兮口齒兮令樂人
 了共無令苦人事爾連受過世人者眠花

了辭月兮盛時尔者不樂其甚衰月尔者
 若此齒不知生則何知死與者孔子麼所
 宜給齒之事也乘奈何所哉人之思違而
 耳同者為不病月之用心共齒者不思不
 衰時之養生矣爾人之嚼老而老曾木林之
 夕嵐為一葉一葉之秋則葛之每葉動初鼻
 矣荻之上葉麼以洩而物言則笑了童部
 兮物喰則慙通給司兮何欲老身之爾者
 有見苦耳耳副同副不似于齒乘矣好夫
 所謂人為髮容了共伊勢海蜃之不葉之深

麼有令憲墨澤之尼樣共為畫之技乎者
 不真頰而曉之添覆麼有物學乎物社人
 之為意也飾耳了耶瑳臬止耶畫者誘引
 謂伊達之花矣止尤者在共觀物之采落
 了則名麼被環摺針之砂而某所有鏡之
 山則沐梅花之油居嗽揚枝之薰而昨日
 者貴於夜光之璧了今日者賤如夕貞之
 核了何之采落如斯也耶朝顏者花之假
 世共不似生而見憂同人李昔手佳了雉
 子之香而不異鬼之嚼煎餅了今也馴入

豆腐之味而為似蝶之膏牡丹了斯迄離
 老之声色也則畫已將為明暮之樂厚哉
 我若魚同則隨魚而令管絃之中遊心矣
 我若魚耳則隨魚而可畫益之旬置身矣
 實夫在世而無畫則且了有而味之膳共
 夕了有八珍之菓共歡令悅老之月而所
 宣給心造罪非施餓鬼之誠季耶我今悔
 一畫之過而誨而世之人了則可畏飲食了
 不了酒色了身者所采若松之綠共心者
 黃了老木之葉迄厭入身秋之凡而從應身

之悟ツクム一羽ツラ麼モ從ヨリ蘭ノ之ツチ培カフ二葉ニ麼モ彌ト疾ト諍ヒテ一
 畫ヒ之レ價ラ而レ不レ換ヤ千兩ノ之レ黃コ金カ子了モ哉ヤ在サ迎テ換ニ
 月花ノ之レ凡レ色ニ而レ貪ラス魚ノ身ノ之レ凡レ味ヲ則レ從ニ詩歌
 連歌可賤見了共聖帝之レ詞命麼人者以
 食ヲ為ス天與手兼好法師麼從玉卮者以飯
 思意味敷則哉畫置流石之レ竹帛泉矣於
 然人之レ忘畫也則可厭者謂忘來而歎耶
 誠為忘天人也正矣

○評云此題ハ白氏文集ニ出テ樂天カ老妻歎テ灯花詩取
 ニ感ノ一字ヲ加ヘテ大和真名ノ辭ト成セリ去リヤ佛之家ノ

經說ニ眼耳鼻舌身意ヲ六根ト云ク色香味觸法ヲ
 六欲ト云テ園通ヲ説テ其利益ヲ勸メ執着ヲ諷メテ其
 損害ヲ懲ラス六根ハ但レ善惡ニ相トス然レ此畫ノ用
 々ヤ四支九竅ノ働ニ勝リテ日夜ニ人ヲ利ス臣御物ヲ害
 スル夏ナレ況ヤ老後手色ヲ離レ六欲ノ中ニ何ヲ樂シ去ラ
 儒書モ此經モ世畫ノ往ヲ稱セ子ハ強テ耳同難附テ畫
 二千金ノ價シ爭ハ復シ文章ノ意地ト知り俳諧ノ筆格
 ト知キナリ誠ニ篇ノ凡流ヲ稱セ公老曾ノ段ニ和琴婉曲ヲ
 寫シ摺針ノ段ハ俳諧ノ談笑ヲ令レテ中此一篇ノ大綱トハ
 管絃ト書ト合ト二月同ヲ讓汰テ畫ハ老後ノ日用ヲ奉ルニ
 前ハ孔子ノ死生論ヲ合セ後ハ秋萬事ノ饑鬼道ヲ引キテ
 儒仁ノ證文ニ文章ヲ圖見タル増テ雁羽ト蘭葉ハ和訓ニ

園字ノ編書十ハ本ヨリ六書ノ例ニ效ヒテ和漢ニ假借ノ絶妙ト稱
スレ然ルニ一篇ノ結段ハ例ニ連飾ノ敵詞ヨリ各ニ遇フ書經ノ
帝範ヲ引テ天ノ字ニ万人ヲ誠スル誠ニ理論ノ虚矣ト云イ誠
ニ文法ノ死活ト云イ和漢ニ假名真名ノ自在ヲ得テ此等ヲ
文揮ノ本懐トヤ云ハシ字人ハ文字ノ置所ヨリ句讀ノ長
短ニ眼ヲ留キナリ

文揮卷之二終

山
新
月

